

前畑遺跡の土塁状遺構

小鹿野 亮

1. 国史跡 前畑遺跡の誕生

平成 27 年（2015）に筑紫野市大字筑紫・若江で発見された前畑遺跡の「土塁状遺構」は、古代の大宰府外郭に深く関わる重要な遺跡であることから、令和 7 年 3 月 10 日に国史跡となった。

土塁状遺構は、大宰府をとりまく山々の一角、大宰府から南東方向の丘陵上にあり、自然の尾根を上手に利用しながら、全長 558m 以上にわたって造られた極めて大規模な土木構造物であった。これまでに見つかった平地を遮断する水城や小水城とは異なり、これまでに類例がない丘陵上で発見されたことが特徴であり、水城や小水城、大野城・基肄城・阿志岐山城などの古代山城とともに機能したものと考えられ、大宰府の外郭線（境界）を想定するきっかけとなった。

2. 高度な土木技術の選択

前畑遺跡の土塁状遺構は、7 世紀中頃～9 世紀後半頃にかけて機能した大規模な土木構造物であることが調査によって分かった。それと同時に、従来考えられていたよりも、多様な土木技術が駆使されていることが判明し、その技術は、地形や地質などによって選択されていたことが分かってきた。

例えば、版築と呼ばれる「極めて薄い水平連続横積層」であっても、花崗岩由来の礫を混ぜており、地層の上面が波打っている部分や、なかには積層が水平ではなく斜行している部分も見られた。また、土塁状遺構の内部に土堤状の隔壁をつくり、その間を粘質土による盛り土を行っている部分もあった。軟らかい地層と硬い地層もみられ、土塁状遺構の全体を硬化させずに硬軟を織り交ぜたバランス工法が採用されている点は、これまでの版築工法の概念を大きく変えることになった。

その技術は、韓国の華城吉城里土城、百済の最後の王都である扶余泗沘都城の東羅城などにも共通するもので、わが国へのその技術の伝わり方をはじめ、今後の古代山城などの土木構造物の調査研究について、その進展に重要な意味を持つ鍵となる遺跡であることが評価されている。

前畑遺跡第 13 次調査の土塁状遺構（横断・第 1 トレンチ）では、その横断形状は、二段築成で下段の西辺には犬走り状の平坦面を持つ形状をなしている。土塁状遺構を構成する地



前畑遺跡第 13 次調査第 1 トレンチの土塁状遺構（横断）



丘陵の尾根を緩やかに蛇行しながら、土塁状遺構が伸びている様子が分かる。南の最高所（標高約 72m）から北の丘陵まで頂部（ピーク）と浅い鞍部が連続しながら緩やかに平野部へ下降し、平野部との比高差は約 46m である。土塁状遺構は丘陵尾根線の頂部を避けて、地形に合わせて、自然の地形と一体となって築造されている。土塁状遺構を構成する地層は、186 層に及んでおり、残存幅 15.58m・高さ 3.55m の規模を有している。

大宰府の南東、福岡県筑紫野市の前畑遺跡。土塁状遺構は、平地にある水城や小水城とは異なり、これまでに類例がない丘陵上で発見されたことが特徴です。

土塁状遺構は、全てを連続した帯状の人工的な盛り土で造るのではなく、自然地形の尾根を土塁に見立てて土木工事を行わない区間があり、他にも部分的に施工する区間や、全てを盛り土で施工する区間がみられます。このため、丘陵の高いところに対しては、土塁状遺構を少し蛇行させて、アップダウンを避けてくねくねと屈曲して伸びていきます。これは、高低差に対して最小限の土木工事とするためで、できるだけ水平を保ち、最短距離を指向しているものと考えられます。

これは、古代の山道などの施工にも共通する要素で、最も合理的な場所を選択していることが分かります。

土塁状遺構の地形による施工差



① 非施工区間

丘陵の頂部（ピーク）では、地形の高低差を避け、盛り土施工を行わない。



② 準施工区間

ピークへ遡上する傾斜地形では、自然の地形を利用し、部分的に施工される。



③ 全施工区間

谷鞍部、ピークとピーク間のやせた尾根には、地形全体を盛り足して土塁状遺構を作出する。

- これらの施工方法に優劣はなく、地形や傾斜によって使い分けられている。
- 帯状の空間を作出しているが、全区間を施工していないことから、断続的。



確認調査 E 地点第 11 トレンチの土堤状積み土

第 10 トレンチと同じく、層状の積み土による土堤状の隔壁を複数箇所につくり、その間を花崗岩風化土（真砂）・褐色粘質土・黒褐色土、シルト（極微細砂）を用いて盛り土している。軟らかい地層と硬い地層がみられ、硬い部分の支持強度は 1 cm 当たり 14.17～23.53kg で、全体を硬化させずに硬軟を織り交ぜたバランス工法が採用されている。



層は 186 層にも及び、砂・粘性土・シルト（極微細砂）を交互に選択的に用い、一層が 1 cm 程のとても薄い地層堆積をなしていた。様々な土壌を使い分けて土塁状遺構を積み上げ、残存幅 15.58m・高さ 3.55m の規模であった。

また、確認調査 E 地点（4 トレンチ方面を望む）では、北に接する丘陵頂部に至るやせた尾根、東西から迫る急峻な谷の鞍部にあり、土塁状遺構の横断面形状は、中心線から東方が急傾斜、西方には一旦犬走り状の平坦面を設けた緩斜面となっており、下端幅 14.3m・全体高 3.9 m の規模であった。地層は、一見すると横方向の水平な連続した層群に見えるが、層状積み土ではあるものの不連続な小単位のユニットを土塁状遺構の横（東西）方向に対してジグザグに移動を繰り返しながら、積み増しを行っている。全体を一度に積み上げるのではなく、地層の塊を交互にずらしながら全体的に盛り上げている。

土だけで盛り土を行うためには、崩れないように積んでいく工夫が必要である。これまでに、水城や古代山城の土塁などでは、「版築工法」と呼ばれる板囲いした枠のなかに土や砂を交互に入れてコツコツと叩き締めて、地層を均一に積んでいく方法が教科書的な解釈であったが、前畑遺跡の土塁状遺構は、単純な版築工法だけではなく、多様で高度な土木技術が古代に存在していることを示している。古代山城の土塁や水城・小水城などの築堤にも、花崗岩由来の礫の意図的な混入、水で混ぜたような地層の乱れ、地層どうしが波打っていたり、黒褐色土の塊状の盛り土など、前畑遺跡に共通する要素が再確認されており、古代の土木構造物の技術を再検討する必要も生まれている。

3. 前畑遺跡をとりまく大宰府関連遺跡と空間意識

前畑遺跡の土塁状遺構の発見は、従来、私たちが考えていたよりも遙かに広い大宰府の空間をとらえることにつながっていった。

その一方で、成立期の大宰府を取り囲む水城、大野城、基肄城、阿志岐山城がその外郭を形成し、山々がその空間を規定していったことで、「囲む」ということと「北が上」という固定概念があったことも事実である。

そこで、方向を変えて「視点ずらし」で大宰府を鳥瞰してみよう。例えば、海域（博多湾）と陸域（大宰府）とをつなぐ線を中心にイメージを回転して考えてみると、大宰府に至るその二日市地峡帯の最奥部に水城が築造されていることが分かる。また、その西方には小水城群によって遮蔽される防御線があり、水城の西方に八つ手状に広がる丘陵の谷筋を閉塞している。現状では、昭和 4 年（1929）に発見された大土居・天神山・上大利の各小水城と、その他にも小倉・春日の谷筋に推定されており、最終的には水城の内側、太宰府市大佐野の東西に伸びる狭い平地へと連なっている。この平地の東方は、大宰府の中心部へと直結する西からの位置



歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～

関係にあることから、外敵の侵入に対する水城との補完関係を考えれば、地形的にはその防御上、必ず遮断する必要性がある。

一方でその東翼には、志賀島や奥博多湾から糟屋郡の郡域を経て大野城に至っている。糟屋郡内では、交通関連遺跡の調査が進展し、糟屋評家・郡家と考えられる阿恵官衙遺跡をはじめ夷守駅家と考えられる内橋坪見遺跡、山陽道の遺構、山陽道を分岐して糟屋郡内を抜けて御笠郡に至る古代官道などが発見されている。糟屋郡で山陽道から分岐し、南下して大野城の東麓を通過する古代道は、糟屋郡家・夷守駅家から宇美八幡宮を直線的に通過して、大野城の正面景観である北東麓を望みつつ、蘆城駅家（御笠地区遺跡 A 地点が推定地）、阿志岐山城に至っている。蘆城駅家は、瀬戸内海へ通じる豊前道の大宰府からの最初の駅家でもあることから、蘆城も夷守も衢状をなしていることになる。この夷守駅家～蘆城駅家間の太宰府市一字美町の行政界付近には、「只越（ただごえ）」と呼んでいる峠があって、現在でも主要道がこの峠を最短距離で結んでいる。

また、さらにその外周には、東翼に三郡山系、西翼に脊振山系が肥前国松浦郡付近にまで自然の壁として存在しており、海域から見た大宰府を守っているのである。そのような視点でみると、海路からの侵入経路を古代山城などの配置と併せて考えてみる必要があるように思われる。倭国侵攻の「橋頭堡」（敵地での不利な地理的な条件で、戦闘を有利に運ぶための侵攻拠点で、兵站（ロジスティックス）確保の前線基地）を逆に防御する側からの視点である。おそらく、正攻法なのは対馬（金田城）から博多湾への侵攻ルートが正攻法であり、その次に唐津湾（肥前松浦郡）へ侵攻してくるのが、歴史的事象を見ても明らかである。

また、対馬海流の流向を考慮しなければならないが、西九州方面からの侵攻ルートも想定される。従前では、有明海への侵攻が想定されていたが、その場合は海路を反時計回りに大迂回することになり、むしろ、五島列島（小値賀島・宇久島）～平戸島経由、佐世保湾辺りへの侵攻が最短経路となる。陸路を佐賀平野へ侵入した場合、肥前国側にはおつぼ山城・帯隈山城があり、とくにおつぼ山城は唐津湾からも陸路でのアクセスが容易である。筑後川を挟んだ対岸には高良山城があり、筑紫平野（筑後平野・佐賀平野）最奥部に基肄城が存在していることになる。遺構としての連続性については、詳らかにはし難いものの、基肄城の麓の狭隘地を小水城（関屋土塁・とうれぎ土塁）で塞ぎ、その先に前畑遺跡があるという位置関係になり、土塁状遺構の性格を防御壁という位置付けだけで評価することは難しいものの、その海域を指向した広域的な立地については、符合的な位置関係にあることは、看過できない。

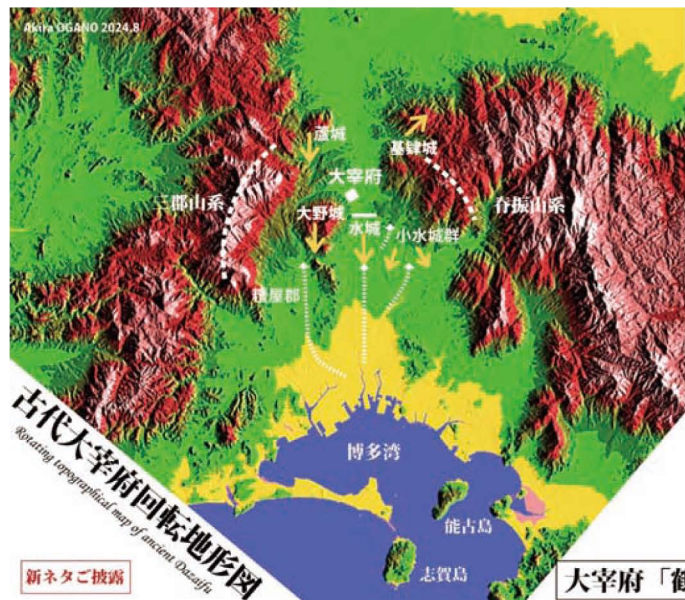


国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野 歴史探鼎談 ～朝まで語りたい前畑遺跡～



確認調査E地点第4トレンチ
の上段状遺構（東から）

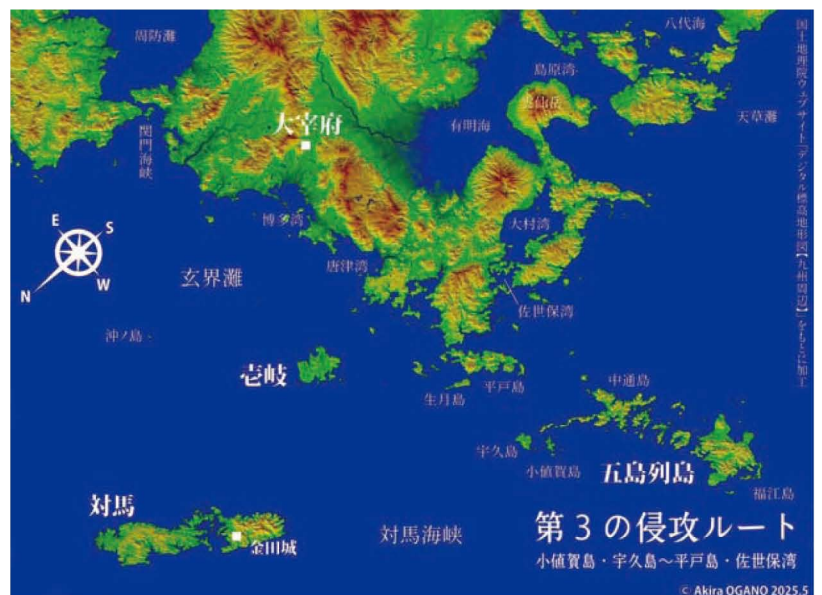
下端幅 14.3m・全体高 3.9mの規模で、地層は、一見すると横方向の水平な連続した層群に見えるが、小単位のユニットを東西方向に対してジグザグに移動しながら、積み増しを行っている。



○博多湾と水城大堤を中心に地形を回転。
糟屋郡 水城の内側へ抜ける谷筋となっている。

新ネタご披露

大宰府「鶴翼の陣」

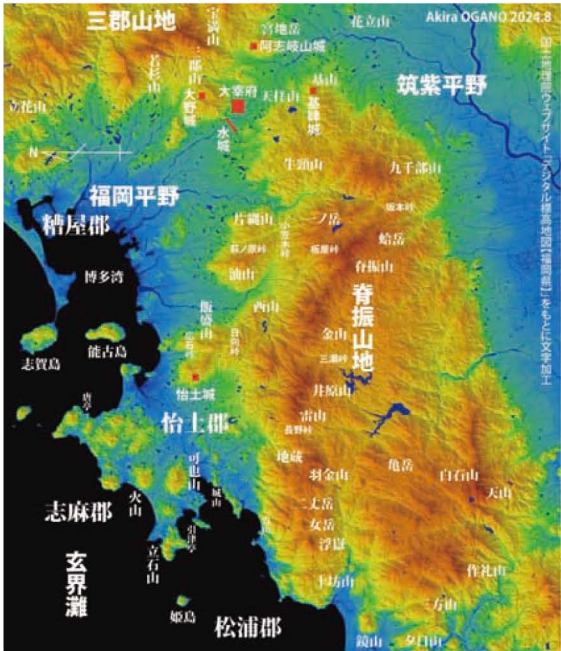


第3の侵攻ルート
小値賀島・宇久島～平戸島・佐世保湾

© Akira OGANO 2025.5



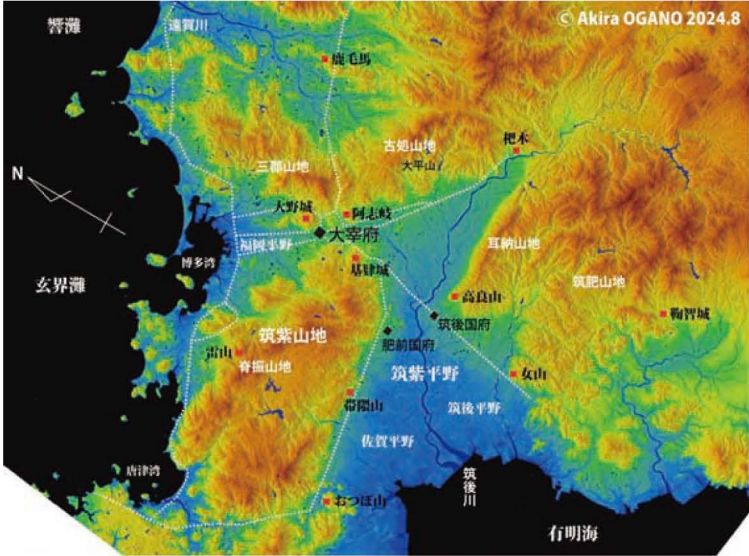
国史跡指定記念 古代史トークセッション in 筑紫野
歴史探鼎談 ～朝まで語りた前畑遺跡～



新ネタご披露

【視線ずらし】西から斜め見た大宰府

北部九州の海の出入りは、「松浦郡」を外して考えることは出来ませんが、海路から考えてみますと、怡土城は、あるべくしてそこにあるような気がしてきました。それまで内向きに籠っていた大宰府の防衛布陣を打ち破ってしまっている感じがします。天平勝宝8(756)年、神護景雲2(768)年、大宰大貳「吉備真備」が怡土城築城専官を務めています。大宰府防衛のための「遣船」「国境守備」「防人」「百姓の窮乏」「行軍式」「諸葛亮八陣」「孫子の九地」「西海道節度使」などのキーワードが並んでいます。さすがは軍事の天才、吉備真備です。



新ネタご披露

西から古代山城と有明海を考える

松浦郡からの侵攻を考えた場合、唐津湾から陸路をとって佐賀平野をぬける場合と、直接的に有明海から侵入する場合は想像できます。

筑後川を挟んだ両岸に筑後と肥前の国府があり、古代山城もバランスよく配置されている感じがします。そうしますと、有明海側からの侵攻も想定されているような気がします。古代山城の研究には、「海」への指向が大切な意識です。



阿志岐山城 築城のコンセプトライン

新ネタご披露

